

偉大な思想家が亡くなつた時、その弟子たちは師の文稿を後世に伝えようとするだろう。その時、師の文言をそのままいじらずに忠実に残そとする者がいる。しかしそれは、実は色々な意味で難しいことだし、後世の人々に対して不親切だという考え方もあるだろう。誤解しやすい箇所は、師の真意が正しく伝わるよう補正しておくべきだという意見も当然ありうる。

しかるべき様式に整えて残さなければならぬと主張する者もいるだろう。また、師の講義や折々の発言を弟子が記録していくとしたら、それらの記録を収めるべきなのか、これは一般論で片付くよほ簡単な問題ではない（孔子の在天の靈は、『論語』を読んで、自分はこういうことを言つた覚えはないと咬いているかもしれない）。しかし、そういう記録も「自著ト異ナルコトナシ」という信念で大切に残してくれた人々がいて、その思いを無にさせまいとする家族や子孫があつて、(+)に(+)して信じ難いよほな史料が現われたのだ——過日、三浦先生の研究室でこの『納扇先生全集』を見せていただいて、こんな余計なことをまで考えた。

フランスにおける中江兆民と幸徳秋水の著作の出版

米原謙

日本の漫画や近現代の作家の文学作品がフランスで大衆的な人気を博していることは、すでによく知られた事実であろう。しかし近年、フランスで近代日本の政治思想の古典が精力的に出版されていることは、日本の研究者には意外に知られていない。代表的なものとして福澤諭吉の『福翁自伝』(*La vie du vieux Fukuzawa racontée par lui-même*, Traduit par Marie-Françoise Tellier, Editions Albin Michel, 2007) や『福澤全集縮』(*Plaidoyer pour la modernité: Introduction aux œuvres complètes*, Traduit par Marion Saucier, CNRS Editions, 2008) などもあるが、(+)では中江兆民と幸徳秋水のフランス語訳について紹介した。

対象として取り上げるのは以下の本である。クリスチン・レ

ヴィーハルト・ド・ハルモン共訳『二哲人経縄問答』(*Dialogues Politiques entre trois images*, CNRS Editions, 2008, Traduit par Christine Lévy et Eddy Dufournmont), ハルト・ド・ハルモン／口

ア・ハルダ共訳『1年有半・続一年有半』(*Un an et demi suite, Les Belles Lettres, 2011, Traduit par Eddy Dufournmont et Romain Jourdan』, クリストフ・ド・ハルモント(=中江*

(東海大学教授)

紀の怪物帝国主義」(L'impérialisme, le sceptre du XXe siècle, CNRS Editions, 2008, Traduit par Christine Lévy)である。なお、れいの三つの訳書には、クロスチン・レヴィの「序文」とエドワード・デュフルモンの「解説」が付されている（ただし『二十世紀の怪物帝国主義』の場合は「解説」はない）。

以下の文章は、翻訳を担当された三人のフランス人日本研究者自身による翻訳の経緯や解説である。米原の求めに応じて、翻訳者の三氏が別々に執筆されたものなので、文体や執筆の趣旨は統一されていないが、三氏の文体を尊重して大きな修正を加えずにそのまま掲載したい。話が通じやすいように、デュフルモン氏、ジユルダン氏、レヴィ氏の順に並べることにする。なお各氏の文章のタイトルは米原が勝手に付したものである。

エドワード・デュフルモン「翻訳の経緯と私の関心」

われわれ三名は、中江兆民の『三醉人経綸問答』と『一年有半・続一年有半』、幸徳秋水の『二十世紀の怪物帝国主義』のフランス語訳を出版した。まず、その企画の経緯について説明したい。

まず1907年、明治時代の左翼運動について研究していたレヴィさんが、兆民の『三醉人経綸問答』と秋水の『二十世紀の怪物帝国主義』を翻訳出版しようという着想をもつた。その

ころアジア主義の研究をしてきた私は、兆民の『策論』を読んで、兆民に好奇心を引かれていた。レヴィさんにそのことを話

したら、彼女は『三醉人経綸問答』仮訳の企画に私を加えて下さった。こうしてわれわれは『三醉人経綸問答』の翻訳を半分ずつ分担し、さらにレヴィさんが自由民権運動と兆民についての「序文」を書き、私が兆民の思想を紹介する「解説」を執筆することにした。

仮訳『三醉人経綸問答』が出版された2008年、レヴィさんと私は兆民の重要な著作すべてを翻訳するつもりで、その手始めとして私は『一年有半・続一年有半』の翻訳に取りかかった。仮訳『一年有半・続一年有半』の出版を引き受けてくれる出版社を探していた矢先の2008年夏、浅利誠氏の紹介で修士論文として『一年有半』の翻訳を完成していたジユルダンさんを知った。彼の翻訳は優れたものだったので、私は『続一年有半』を翻訳するとともに「解説」を執筆し、レヴィさんに「序文」の執筆をお願いした。こうして2011年に、われわれは『一年有半・続一年有半』の仮訳を出版することができたのである。その間、私は西田幾多郎研究のダリシエさんの招待で、日本思想のアントロギーの一部として、兆民の思想を紹介する論文と『理学鉤玄』の数ページを翻訳したが、それは今年（2011年）Vrin社から出版される予定である。

以上、翻訳の経緯について説明した。次に私が兆民研究に傾倒した学問上の理由について説明したい。民主主義が普遍的な価値をもつことはいうまでもないが、現在の世界では、いまだに多くの国々でそれは当たり前ではなく、むしろ民主主義＝歐

米化という単純な図式が横行している。世界史的観点から考えると、明治時代の日本は歴史の発展段階における先端的例と看做すことができ、ルソーと民主主義を日本に紹介した中江兆民の役割もその点で重要である。文化と言語を超えて、兆民が民主主義をどのように考え、説明したかを考察すれば、世界の思想史に有意義な貢献をすることができるではないだろうか。

『三醉人経綸問答』と『一年有半・統一年有半』の仏訳は、私にとって単に翻訳だけが目的なのではなく、中江兆民の思想と日本の思想史における彼の位置づけを考察する試みでもあつた。翻訳だけではなく、自分の研究の成果に基づいた解説を加えた所以である。私は『三醉人経綸問答』の解説に「三人の人物から見た中江兆民の思想」というタイトルをつけた。三人の人物が兆民の分身だという説に従つて、兆民の様々な側面を紹介することができると考えたからである。また『統一年有半』の解説では、兆民が中国思想と十九世紀フランスの自由思想や科学的唯物主義を参照して、自分の唯物論を構築しようとしたこと、彼の思想とジャン＝マリー・ギュイヨーとの類似性を説明した。

興味深いことに、現在フランスでは兆民が興味を示したフランス人の思想家が再発見されている。われわれが『三醉人経綸問答』の仏訳を出版した直後の一〇〇八年十一月、全く偶然にも、アミアンでバルニ (Jules Barni)を中心とした学会が開催された。また一九九一年と二〇〇〇年にバルニの『民主國の道

徳』 (*La Morale dans la Démocratie*) と『共和国読本』 (*Manuel Républicain*) が再出版されている。ほぼ百年ぶりの好事である。 XVII世紀ヤン＝マリー・ギュイヨー (Jean-Marie Guyau) の『義務も制裁もなき道徳』 (*Eauisse d'une morale sans obligation ni sanction*) が一〇一二年に再出版された。それに先立つ一〇〇八年には、フィリップ・サルナールを始め、何人の研究者がギュイヨーを取り上げている。『理学沿革史』のフュエーもまた然りである。

兆民研究は、共和主義者のフランス人思想家が再発見されているフランスと同様に、十九世紀後半の思想を再発見することを意味する。兆民は「東洋のルソー」というイメージが強いが、彼の思想を理解するにはルソーより十九世紀フランスの思想家に注したほうがいいのではないかと、私は思っている。研究の進展に伴つて、兆民に影響を与えたフランス人が非常に多様だったことがわかるからである。『道徳論』のタイトルで兆民と伊藤大八が翻訳したシャルル・ルヌヴィエ (Charles Renouvier)、自由思想 (Libre Pensée) のアンドレ・ルフェーブル (André Lefèvre) や『将来の非宗教』のジャン＝マリー・ギュイヨーなどは同じ傾向の思想家だったわけではない。兆民の唯物論は、同時代のフランスでポピュラーだった科学的唯物論の日本版といえるが、兆民の好んだフランス人思想家は唯物論者だけではなかつた。兆民の唯物論の形成過程は更に研究されるべきである。そうした観点にたつと、フランスで兆民の著作を

翻訳し紹介する意義はきわめて大きいと考えられる。レビューアーと私は、すでに『国会論』『選舉人目ざまし』『平民の目さまし』の翻訳を完成しており、これらの著作もいずれ出版したい。

ロマン・ジュルダン「兆民の翻訳に参加して」

中江兆民に关心を持ったのは、彼がフランス学者であつたという単純な理由による。フランス人の私にとって、啓蒙などのフランス文化を兆民がどのように理解していたのか、興味深かつたからだ。

私は国立東洋言語文化学院(INALCO)の修士課程中に、兆民の受けた教育と彼のフランス留学について調べ、当時、私の指導教官であつた浅利誠先生に奨められて『一年有半』を読み始めた。その中で兆民は、政治家のコルベールやティエールを徳川家康や大久保利通と、また文人のコルネイユやユゴーを森槐南や野口寧斎と比較しており、私はますこのようないくつかの啓蒙と「四書五經」を比較するほど、歴史にも非常に博学だつたのだ。

このような時空を超えた幅広い知識を兆民がどのように発揮

させたかは、『一年有半』を見ていくとよくわかる。彼は「世界との交際を継続」しながら、病床で読んだ新聞で知った政治状況や、弟子達の経済的、科学的な成功、また時折大阪で見た義太夫節の戯曲について隨筆の形で語りながら、明治社会を全体的に評論している。これは後に「四顧寂寥として人影なく」、「墓場にでも行てるよう」な環境の中で書かれた形而学的な論文『続一年有半』とは正反対の目的で書かれている。『一年有半』は隨筆であるために一目で分かるような結論はないが、その中でも彼は中心的な概念を一つ主張している。それが「哲学」の必要性である。「哲学」さえあれば、明治の人々は古今東西の「理義」を差別せずに、社会における経済政治や文学など、すべての面を深く改善することができる、彼は主張している。つまり、『一年有半』はその「哲学」を実行する手本となつていているのだ。

兆民の個性的な思想と、その背景にある多様で活発な明治社会を多くのフランス語圏の人々に紹介するため、『一年有半』の翻訳には、約三百五十の注解と三百を超える人名索引を加えた。兆民の現代性豊かな思想が明治社会に刺激を与えたように、この本がフランス語圏の社会に刺激を与えることを期待している。

クリスチーン・レビューアー「フランスにおける幸徳秋水」

このよだな時空を超えた幅広い知識を兆民がどのように発揮

『二十世紀の怪物帝国主義』の著者・幸徳秋水は、フランス

では一九一〇年末から一九一一年一月の間に、その名前が知られるようになった。フランスでは大逆事件は幸徳事件と呼ばれ、その分析や動員にはドレフュス事件のパラダイムが機能した。

『二十世紀の怪物帝国主義』には、エドワード・サイードを世に知らしめた『オリエンタリズム』よりある意味では重要だといえる『文化と帝国主義』と通じる側面がある。サイードはこの本の中で、十九・二十世紀の諸帝国から派生した文化的規範のもつグローバルな性格と、帝国主義に対する抵抗の歴史的体験という、二つの重要な要素を組み入れている。サイードは現代の知識人かつ亡命者という二重の立場から、西洋の認知システムと袂を分かち、パレスティナの大義を西洋人にとって認知的に聞き取れるものにしようと試みた。その「知識人」が民主主義の中⼼的概念として出現したのはまさにドレフュス事件の際であったが、サイードはその意味での知識人そのものであつた。

その当時から、「馬蹄銀事件」あるいは「分捕り事件」の名のもとに知られている醜聞を追求する報道キヤンペーンの主導者であった。告発されていたのは、義和団の乱制圧に日本が多大な貢献をした際に、中国の国庫からの横領で私腹を肥やした日本軍の士官たちである。幸徳はとりわけ国家における軍隊の地位拡大を強く批判していた。このキャンペーンは成功をおさめ、一部の下士官が有罪判決を受け、ほかの何名かの軍人は訴追を免れるべく横領した資金を秘密裏に返還するという成果が得られた。この頃、幸徳は『万朝報』で最も人気のある記者となっていた。何人かの歴史家によれば、彼はおそらく陸軍大臣山縣有朋から最も憎まれていた人物でもあつた。

その後、幸徳は『万朝報』が戦争支持へと編集方針を変更したことに対し、一九〇三年十月に同新聞社を退社、堺利彦と共に平和主義の週刊『平民新聞』を創刊する。同誌は日露戦争の間中、日本全国から戦争反対勢力を集結し、戦争の残酷と朝鮮の植民地化という戦争の真の課題を告発し続けることになる。

戦時中としては模範的ともいうべきこの道程は、二人を民主的知識人の立場から遠ざけ、当時の国際世論に支持されていた別の流れである社会民主主義へと導いていく。その社会民主主義とは、第二次社会主義インターナショナルに代表されるものである。日本帝国軍の策謀に反対する最初の報道キヤンペーンが行われた際、モデルとなつたのは、知識人が演じる批判的役割の場としての報道の使い方ではなかつただろうか。幸徳秋水は、

は廃刊を余儀なくされた。幸徳は一九〇五年に六ヶ月の投獄生活を終えたあと、アメリカに渡り、無政府主義運動に出会い、この運動に接近していく。

幸徳たち日本の活動家の逮捕は、政治活動に与する報道機関によりフランスに伝えられたが、その際には、たとえば社会党の機関紙『リュマニテ』(L'Humanité)の一九一〇年十一月二十七日号の第一面では、フェレール事件との比較が行われている。この新聞の立場は社会主義であり、何ら無政府主義的ではなかった。日本の活動家たちが逮捕された前年、スペインでのフェレールの死刑判決と執行が、全ヨーロッパの労働運動を震撼させていた。無政府主義者の教育者フェレールを支持する

キャンペーンが、ドレフュス事件の記憶を喚起したかのように、主として一九一〇年十一月から一九一一年一月までである。この二ヶ月間に、多数の記事が主に無政府主義運動の機関誌『ル・リベルテール』(Le Libertaire)や社会党の機関紙『リュマニテ』を始め、無政府主義者や左翼系日刊紙に掲載されており、それらの記事は当時の抗議運動の様子を知る手掛かりとなる。幸徳事件は「新たなフェレール事件勃発」という見出しのものと報道され、日本という遠い国の出来事に読者たちの関心を引きつけようとしていたことがわかる。

電報を抗議の手段に選んだ人々の中で特に目立つのは弁護士や医師であったが、中にはドレフュス事件の際に活躍した著名人の名も現われる。例えば、今なお有名なアナトール・フランス(一八四四—一九二四)や、『リュマニテ』の主幹ジャン・ジョレスがその署名運動に名を連ねている。弁護士たちの署名は、『リュマニテ』に寄稿していたジャン・ロンゲ Jean Longuet (一八七六—一九三八)が率先して集めたものである。また、

事実上、ドレフュスのような愛国者、軍の士官と、幸徳のような無政府主義者の間にどのような共通点があるだろうか?

一人の医師が主導した署名活動も際立っている。その医師は現在では無名の人物だが、当時はドレフュス事件に際して組織された人権同盟の重要人物であった。社会医療組合の会報には、

十二月九日付のアメリカの新聞 *The Daily News* を情報源と明記した、事件についての詳細な記事が掲載されている。ほかに、

幸徳秋水らへの連帯運動に全力を尽くした機関誌『ル・リベルテール』と『ラ・ゲール・ソシアル(社会闘争)』(La guerre sociale)を発行していた無政府主義者のグループをあげることができる。

一九一〇年十二月十七日と二十日の間に際だった動員がなされていることから、日本大使館の流した情報に対して抗議すべく人々が立ち上がり始めたと考えることができる。幸徳がトルストイやクロポトキンを翻訳した人物であること、アメリカやフランスに多くの仲間を持ち、すでに抗議運動が始まっていることなどの説明も掲載されている。

忘却から脱却すること、それはまさにサイードが知識人に与える義務であり、そのための規則は「必ず忘れられていくすべての人々、すべての問題を表象すること」であると彼は述べている。幸徳事件は検閲を受け、戦後の日本にも重くのしかかり続けた。とはいえ、幸徳事件のこだまは、戦前も戦後も、重要な文学作品の中で響きづけてきた。例えば、住井すゑと彼女の娘の対談(住井すゑ・増田れい子『わが生涯——生きて愛して闘つて』岩波書店、一九九五年)で、反抗のきっかけになつたのは何かと尋ねる娘に対し、一九九五年当時九十三歳の住井はこ

う答える。「繰り返しになるけど、わたしが一生忘れられない一番のショックは、やっぱり幸徳事件です。私が小学校三年のときです」と答えている。私もフランス語訳を通して事件当事者たちの公式の名誉回復に貢献できればと考えている。

(大阪大学教授)